SUPER - LOVE

黴菌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＳＵＰＥＲ‐ＬＯＶＥ

【Ｎコード】
Ｎ７０６１Ａ

【作者名】
黴菌

【あらすじ】
泣きたい時、寂しい時…あなたを助けてくれるものは何ですか。きっとそれは身近すぎて、あなたは気付かないかもしれない。どんなものにも愛はある。愛を感じたい時…この物語があなたの心に残れたら……。切ない恋、目に染みる愛、そんな素敵な感情の詰まった物語達。

ＭＥＭＯＲＹ　前編（前書き）

この物語は友達に聞いたものです。
友達が作ったのかはわかりませんが、とても心に残った話だったので、私なりのアレンジを加えてここに書き残します。

MEMORY　前編

竜也に『それ』が手をのばしたのは2年前だった。

ー2年前……

「由佐！！次何乗る？」

高校1年にもなって子供みたいな顔で竜也は言った。

竜也と私は今年付き合い始めて、今日は初めてのデート。

「お化け屋敷はいろうよ！！」

私も竜也のテンションに乗っかって言った。

この日は、最高な1日になるはずだった。

「おっし！じゃあ行こうぜ！！」

竜也が私の腕を強引にひっぱっていった。

「竜也痛いよぉ」

その言葉が届いたのか竜也は止まった。
…のかと思った。
次の瞬間竜也は前のめりになって倒れた。

「竜也！？」
私は焦ってかけよった。
竜也の意識はなかった。
誰かが救急車を呼んでくれて、私は意識のない竜也と一緒に病院へ行った。

連絡を受けたのか、竜也の両親と姉がいた。

「先生！竜也は？？」
医者が来ると、すかさず竜也のお母さんが聞いた。

すると…医者から衝撃的な言葉がでてきた。

「そんな…先生…何かの間違いですよね？？」
竜也のお母さんが涙声で言った。
竜也のお父さんはずっと下を向いていて、竜也のお姉さんは泣いていた。

私はそれをボーっと見ていた。

「だって…あの子…すごく元気な子で……。」

「お母さん、落ち着いてください」

医者が冷静に言い放つ。

「だって……竜也は一体…どうなるんですか？」

ー2年後…

あの日の事は忘れられるはずがなかった。
竜也とはずっとずっと一緒にいられるってそう思ってたから、今でもあの日は夢だったように思えるんだ。

「由佐？」

聞き慣れた声に顔をあげる。

「部活終わったから、帰るぞ。」

竜也だった。

「うん。」

二人でトボトボと帰った。

「なあ、あさって家族旅行行くんだ。由佐も一緒に行っていいらしいから行こうぜ！！」

その誘いは、ある時が近付いてきている証拠だった。

もう…そんなに経っちゃってたんだ……。

「由佐？」

「あっうん行く行く！！楽しみだなぁ」

そう返したけど…頭の中では全く違う事がくりかえし巡っていた。

竜也の病気の事。

あの日医者はこんな事を言った。

竜也は普段の生活には支障をきたしていないが、脳に障害があるらしい。

それが2年前のあの日に姿を表わしたのだ。

竜也は……記憶を消さないと死んでしまう。

それは今すぐと言う話ではなかった。

それでも、あの日から2年近く経って今、その時がすぐそこまできたのだ。

竜也はまだそれを知らない。

自分の病気の事さえ知らないのだ。

だから……竜也にはまだ

「記憶を消す」

か

「死ぬ」

かを聞いていない。

「じゃまた明日な」

竜也のその声でもとの世界に引きずりもどされた。

「うん。バイバイ」

そう言うと竜也は去っていった。

私は家に入って、すぐに自分の部屋に閉じこもった。

いつ？

竜也は…いつ…何処へ行ってしまうの？？

最近はそればかり。

だからまともに眠れない。

毎日目の下にはクマができていて、私は竜也にバレないようにいつもファンデーションを塗った。

「由佐ー！竜也君のお母さんから電話よ！！」

部屋の外から母さんの声が聞こえた。

私は軽く返事をして、少し緊張しながら電話にでた。

「もしもし…」

「由佐ちゃん？竜也から旅行の件は聞いた？？」

やっぱりそうなんだ…。

竜也は…もう…。

「聞きました。竜也…いつなんですか？？」

主語のない質問を竜也のお母さんは理解したようだった。

「後一週間なの」

短い。
そんな短い時間で私の決心がつくなんて到底思えなかった。

「お母さんは…どうする気ですか？？」

少し間をあけて竜也のお母さんは言った。

「私は…竜也の記憶を消すつもり。親戚に育ててもらう気よ」

「嫌です…。記憶を消したら…竜也にはもう会えないんですか？？」

受話器から鼻をすする音が聞こえた。

「また再発する恐れがあるから…それはできないの」

「どうしてですか？なんで竜也の記憶を？？」

「そうしないと竜也は死ぬの！！」

そんな事は…わかってる。

でも…素直に受け止められるはずはなかった。

「竜也が生きるためなのよ……」

竜也のお母さんの泣き崩れる音がする。

きっと1番つらいのは…竜也の家族なのに…。

「ごめんなさい…では」

そう言って私は電話を切った。

そして泣き崩れた。

なんで竜也なの？？

どうして私の愛した人なの？

その叫び声は私にしか聞こえなくて、私にしか理解できないものだった。

また眠らずに朝が来た。

明日から夏休み。

いつもなら嬉しかった大連休も今では何の意味もない。

でも、これが最後…なんだ。

私は…竜也のために…自分をごまかすために楽しまなくちゃいけない。

そんな事を考えながら学校に向かった。

暑苦しい終業式を終えて、すぐに下校時間となった。

竜也のくる学校も…これで最後なんだろう。

竜也が記憶を消せば、竜也は遠い遠い所へ引っ越す。

竜也と歩く帰り道もとても貴重に思えた。

「明日、朝９時くらいに迎えにいくから」

「うん。楽しみ！」

自分の感情とは裏腹にただそう言っておいた。

「おう！じゃな！！」

そういって右手をあげたまま竜也は帰っていった。

当然眠れるはずもなく、目をあけたまま一夜をあかした。

昨日の夜に用意しておいた荷物を確かめてご飯を食べた。

食欲はわかなかったが、食べないと心配されるし。

あれからもう2日経ってしまってる。

後…5日か……。

そんな事を考えてると、家のチャイムが鳴った。

時計を見ると9時前だった。

私は荷物を持って玄関のドアをあけた。

「おはよー！！」

竜也が満面の笑みでそこに立っていた。

不思議とこっちまで顔が緩んでしまう。

そして私は竜也の家の車に乗った。

「今から何処行くと思う？」

竜也がワクワクした顔で聞いてきた。

そういえば…まだ聞いてないや。

「えぇ何処何処？？」

「海！！よく考えたら俺あんま海行った事ねぇから！」

ちょっと意外。

竜也だから遊園地巡りとかするんだと思ってた。

「竜也の事だから遊園地巡りとかだと思ったでしょ？？」

竜也のお姉さんが悪戯っぽく聞いてきた。

「ヒデェ！！なんだよそれぇ～」

竜也がそう言うと車内は笑い声でいっぱいになった。

私も一緒に笑った。

そんなやりとりをする内にいつの間にか目的地に到着。

ホテルに荷物を置いて真っ先に海に向かった。

海には結構人がいた。

私は泳げないので浜辺でお城を作ってみたり、貝を探したりしていた。

「泳がねぇの？」

上を見上げると竜也がいた。

「泳げないの！！」

そう私が言うと、竜也はふぅーん、と言って私の隣りに座った。

「竜也…泳がなくていいの？」

「由佐が泳げないなら俺は別に泳がなくていいよ。無理に泳がせようとも思ってねぇから安心せい」

そう言って竜也はポンと私の頭に手を置いた。

私はそのまま顔を伏せた。

顔が赤くなったし…
なによりも……泣いてしまいそうだったから。

「あっ由佐！！見ろよコレ！」

竜也が子供のような声で言ったので顔をあげた。

竜也の手には小さい小さい綺麗なピンク色の貝殻。

「サクラ…貝？」

「おう！お前にやるよ！！」

竜也は私の掌にその小さな宝石をチョコンと置いた。

「ありがと…」

もう涙をたえる事はできなかった。

「どうした！？」

竜也が目を真ん丸にして言った。

「ううん…砂が目に入ったの」

目をこすって竜也に笑顔をみせた。

上手く笑えてたのかな？

そうして楽しい時間は過ぎた。

次の日になって、竜也との時間が減った。

残り四日……。

竜也は熱を出した。

「ゴメン…せっかくの旅行なのに……」

これはきっと…竜也の病気によるものだろう。

「まだ旅行は四日もあるじゃない！！」

なるべく元気な声で言った。

「そうだな…来ようと思えばまた来れるんだもんな」

その言葉に胸が痛む。

「また来ようねっ！」

今は…きっとそう言うしかない。

その時ドアが開いて竜也のお母さんが入ってきた。

「竜也、病院にいくわよ」

「うん。じゃっ由佐、また後でな」

竜也は弱弱しくそういって竜也のお母さんと一緒に部屋から出ていった。

私は一人で泣いた。

悲しくて。哀しくて。

竜也ｓａｉｄ

俺は母さんに連れられてよく来る病院に行った。

なんか由佐、元気なかったなぁ。

検査を受け終わって、母さんは

「待ってて」
と言ってどこかへ行ってしまった。
「竜也君？」
振り向くと、昔倒れて入院した時に会った雨季がいた。
「久しぶりぃ」
俺がそういうと、雨季は笑顔で車椅子に乗って俺の横にきた。
「今日はどうしたの？」
「ちょっと風邪ひいたんだ」
笑って俺は言った。
「やっぱり…もうその時がちかいんだね」

雨季が呟いた。

「どういう意味？」

「まだ知らないの？」

俺が聞くと雨季は目を真ん丸にしてこっちをみた。

「うん…？」

「竜也君…病気なんだよ」

…は？

「竜也君は選ばなきゃいけないんだよ」

ＭＥＭＯＲＹ　後編

由佐ｓａｉｄ

私はいつの間にか眠っていたらしい。

日付がかわっていた。

後三日なんだな…。

そう思うと竜也が気になって竜也の部屋に向かった。

ノックをする。

…が返事はない。

すこしドアをあけて覗いてみると、竜也はベットに座ってこちらに背をむけていた。

「なんだ…いるじゃん」

そう言って中に入ると竜也がこっちを振り向いた。

泣いていた…。

私は竜也が泣いたのを初めてみた。

「なんで…黙ってたんだ」

胸が締め付けられた。

「なんの事…」

もうわかってる…でもしらばっくれた。

「知ってたんだろ?俺の病気の事!!この旅行だって最後の思いで

作りなんだろ！？また来る事なんてできねぇんだろ！？」

「…竜也は…どうするの？」

俯いて私は聞いた。

「俺は……」

竜也の言葉が詰まる。

「竜也…記憶を消して」

「…由佐は寂しくねぇのかよ？」

…怖いに決まってるよ。

好きな人に忘れられるのは…。

でも…

「寂しいよ？でも…竜也には生きていて欲しいの…」

「由佐…」

「ごめんね……疲れたでしょ？ゆっくり休んでね」

震える声で言って私は部屋を飛び出した。

そこで竜也の両親とお姉さんに会った。

「なんで…竜也が知ってるんですか？」

息を切らしながら聞いた。

「多分…雨季ちゃんね」

お姉さんが答えた。

雨季ちゃんとは…竜也と仲がいい女の子だ。

「雨季ちゃん…つらかったんだろうな……」

私がボーっと呟く。

竜也は優しいから…。

生きていた方が…いいんだよ。

翌日…

眠らないまま朝がきた。

後二日。

ロビーに行くと竜也の両親とお姉さんがいた。

「明日…記憶を消すから……今日が最後ね」

お母さんが腫れた目をして呟やく。

「そうだな」

無口な竜也のお父さんがいう。

竜也はまだ風邪を引いている。

私は自分の部屋に籠って、竜也から貰った小さなサクラ貝を見ていた。

竜也との思い出がめぐる。

竜也と初めて話したのは入学式の次の日。

「ハンカチ落としたよ」

「ありがとう」

そのやりとりがきっかけで、私達はよく喋るようになった。

夏休みに入る直前に、竜也に告白された。

「本気で好きだから付き合って下さい！」

不器用な竜也の不器用な告白は、嬉し涙がでるほど私に伝わりました。

そんな事も忘れてしまうの？

「由佐…」

ドアの向こうで竜也の声がした。

ドアを開くとそこには案の定竜也がいた。

「竜也…どうしたの？」

「行こう…」

竜也は私の手を握った。

あまりに弱弱しい力で涙がでてくる。

私は竜也のかわりに竜也の手をひいていった。

ロビーで竜也の家族と出会う。

「待って！何処にいくつもり！？竜也は熱があるのよ！？」

竜也のお母さんがいった。

「でも…時間がないんです！これが最後なんです！！」

立ち止まって私は言った。

「でも…」

「母さん…いいんだ。俺も最後の思いでを作りたい。」

その言葉を聞いて、私は竜也の手を握る力を強くして走った。

外はいつの間にか赤く染まっていた。

砂浜に着くと竜也は下を向いて咳き込みながら息を整えていた。

「竜也…大丈夫? 顔…あげてみて」

竜也は顔をあげた。

「綺麗…」

目を輝かせて竜也がいった。

海を見ると、ちょうど夕日が隠れる頃で空も海も赤くて綺麗。

「私これ…竜也に見せたかったんだ」

「こんなの…今までみた事ねぇよ。ありがとう！由佐！」

またあの笑顔で竜也は言う。

そんな彼を見るとやっぱり涙が出てきた。

竜也はそれについて何もいわなかった。
竜也なりに気をつかったんだろう。

「竜也！由佐ちゃん！！」

向こうから竜也の家族全員がやってきた。

「竜也！」

「母さん！まだ戻らな…」

竜也がそれを言い終わらない内に竜也のお母さんが竜也を抱き締めた。

「目に…焼き付けなさい」

涙声でそう言いながら…。

空は黒みを増し、星が輝きを放ち始め、夜が訪れた。

「あっ見ろ！流れ星！！」

竜也のお父さんが空を指しながら言った。

「えっ何処何処！？」

竜也のお姉さんが楽しそうに言う。

「ほらあそこ！！」

ー…竜也…竜也はあの日の流れる星に何をお願いした？？

私はね……

ー…

次の日、竜也と竜也の家族と病院に行った。

これが…本当に本当の最後になるんだ。

竜也はベットに横になった。

「竜也君…君はどうする？」

竜也の担当医が言った。

「…忘れたくない」

「竜也…」

竜也のお母さんが悲しく囁く。

「でも…俺は…みんなのために生きたい。せっかく貰った命を自分の手で捨てたくない」

「記憶を消すんだね…さぁ…これを飲んで…」

医者が竜也に何かの薬を手渡す。

きっと記憶を抹消するものだろう。

「これって…」

「何も心配する事はないのよ、竜也」

お母さんが竜也に優しくいう。

「ちょっと待って…最後に言いたい事があるんだ」

「母さん…いつも優しくしてくれてありがとう」

竜也のお母さんは泣きながら頷く。

「父さん、俺をいつも楽しくしてくれてありがとう」

竜也のお父さんはもう涙を我慢しなかった。

「姉ちゃん、いつも相談にのってくれてありがとう」

「いいのよ…」

優しい笑顔で竜也のお姉さんは言う。

「それから…由佐…俺はこれからも君以外愛さないから」

「私だってよ」

なるべく元気な声で泣きながら返した。

「俺は幸せだった…。こんな素敵な人の中で生まれる事ができて…」

そういって竜也は医者から貰った薬の蓋をあける。

「さようなら、父さん母さん姉ちゃん、そして由佐……」

「さようなら…竜也」

私がそういうと竜也は一気に薬を飲んで倒れた。

「竜也！」

竜也の家族が叫んだ。

「心配はありません。記憶を消去する時は皆こうやって倒れるので

す」

医者が冷静ともいえる態度でいう。

「これが最後なのか…」

竜也のお父さんの…悲しい呟き…。

「最後じゃないよ」

倒れたまま竜也がいった。

「始まりだ…また…俺達は出会うよ」

「でも…竜也に話しかける事はできないのっ！私が…竜也の恋人だって事も…竜也の家族を竜也の家族と言ってあげることも！」

次々溢れてくる涙をごまかすように私は叫んだ。

「いいじゃないか…わからなくても……父さん母さん姉ちゃんは俺の家族で…由佐は…生涯俺が一番愛した人間だったんだから…」

もうみんなは声をあげて泣いた。

「ありがとう……みんな…本当に…みんなに出会えてよか……」

そう言って竜也は眠った。

そして私を知ってた竜也は消えた。

「おやすみ…竜也…私もあなたに出会えてよかった…」

ー…あの後竜也は親戚の家に運ばれていった。

それが…彼をみた最後だった。

そして…竜也がいなくなって…ちょうど5年が経とうとしていた。

そんなある日の事。

「あら！由佐ちゃんじゃない！久しぶり！！」

外を歩いていると懐かしい竜也のお母さんに会った。

「お久しぶりです…。雨季ちゃんのお葬式ですか？？」

私は竜也のお母さんの喪服姿を見ていった。

「ええ。竜也の大切な友達だったから…竜也の代わりにね」

「私も…部屋探しが終わり次第行きます」

「わかったわ」

竜也のお母さんは小さく頷いた。

そうして竜也のお母さんは曲がり角へ消えていった。

それと入れ替わりに友達の早紀がやってきた。

「由佐ぁ！！」

「早紀！ゴメンねぇ付き合ってもらっちゃって」

部屋探しを手伝ってくれるよう早紀に頼んだのだ。

「いいのいいの！行こう？？」

そうして私と早紀は電車に乗って懐かしい田舎ついた。

「でもさぁ…由佐も変わってるね。こんな田舎に住みたいなんてさぁ…」

早紀が少し笑いながら言う。

「だってここら辺私の好きな場所がいつだって見えるんだもん！！」

「あぁ…海の事ね」

そう…竜也と一緒に来た大好きな海。

流れ星にかけた願いを今でも覚えている自分が阿呆らしい。

「じゃっいこっ！」

「うん！」

そうして歩きだすと向こうから３人の男が歩いてきた。

「次どこ行こうか？」

「うーん…どうする？竜也」

すれ違った時その名前が聞こえて私はつい立ち止まってしまった。

「あっ海で遊ぼうぜぇ！」

そう言った男は私に気が付いて振り替える。

その男の瞳は…なんだか懐かしい。

「どうした？竜也？」

男の友達が心配して聞く。

「由佐…？どうしたの？？」

早紀の声に私はやっと目が覚めた。

「ゴメンゴメン。ボーってしてて」

「もぅいっつもなんだからぁ！いこ！！」

そうして私は早紀に手を引かれていった。

その時…後ろから微かに男の声が聞こえた。

「懐かしい人に会った気がした」

私は…あの日流れ星にこんな事をお願いしました。

「竜也の記憶が消えても…微かにでも確かに私の事を覚えてててくれますように…」

これで…よかったんだ。

私達はそれぞれに違う道を歩んで、それぞれの幸せを見つけた。

多分…これから先…私が彼の恋人だと明かす事は決してないだろう。

でも私はそれでいいと思う。
竜也が幸せなら…もう話す必要なんてないもの。

ねぇ…そうでしょ竜也…。

あなたに会えて…本当に良かった。

あの日あなたに貰ったサクラ貝は永遠に私の宝石になるでしょう。

さよなら…大好きだよ、竜也…。

完

未来日記　前編（前書き）

こんなんあったらいいなって思って書かせていただきました。

『未来日記とは、自分の書いた事が現実に起こってしまう日記。それは選ばれた人になんの前触れもなく突然家に送られてきます。使用方法は普通の…』

「くだらない」

美華がまだ喋り続けそうな勢いだったので、私はその一言で遮った。

「えぇーなんで？だってこれ目茶苦茶欲しくない！？」

目をキラキラ輝かせて美華は言った。

こういうのを信じてしまうのが高倉美華の特徴だ。

「んなもん作り話にきまってんじゃん」

そんな美華に比べて私は冷めてる。

「えぇーもう！愛里ってばそんなん信じないんだから！！だから高

校2年にもなって彼氏できないんでしょ！」

少し頬を膨らませて美華はいった。

「できないんじゃなくて作らないのよー」

それは負け犬の遠吠えなんかじゃない。事実、私は誰かと付き合いたいわけではないし無論、好きな人もいない。

「はいはいそうでしたねっ」

呆れぎみで美華はいった。
美華にはたいへんかっこいい彼氏がいる。
美華も人形のように華やかで可愛らしく、二人はお似合いだ。

「松原愛里いる〜？」

昼休みの教室にある男の声が聞こえる。

また来たか。

「いないって言って」
私は美華に隠れて小声でいった。

「ここにいまぁーす！！」

そんな私を無視し、美華はニコッと笑って右手をあげ叫んだ。

「なぁに隠れてんだよ！！」

来た…三国廉。
何故かこいつは毎日昼休みにやってくる。

「そっちこそ何しにきたんだよ！」

私はこいつが苦手。
私はあまり話かけられるのが好きではないし、こいつがいると調子が狂う。

「愛里ちゃぁんに会いにきたんだよーん！」

このテンションもダメ。

「あっそ。んぢゃトイレ行ってくるわ」

そっけなく言って私は教室を出ていった。

三国が来た時はいつもトイレに行くと言って保健室に逃げ込む。
保健室は唯一、私の憩いの場だから。
保健室の一樹先生も話がわかり、よく相談にのってくれるのでかな

り人気が高ぃ。

「せんせぇーちょっと置いてぇ」

けだるい声で一樹先生に言う。

「なんでいっつも逃げるのかな君はっ」

そう言って一樹先生は私の頭に軽くチョップする。

「なんか嫌なのぉー」

「三国君いい子じゃない！顔も可愛らしくてねぇ〜おばちゃんあの子タイプやわ」

一樹先生が冗談混じりに笑いながらいぅ。

「どこが！！先生！私今日元気に早退します！！！」

そう一樹先生に言って私は保健室を飛び出した。
先生まで…私の事からかって……。

でもこんな時、早退を止めない一樹先生に感謝。

私は手ぶらでそのまま家に帰った。
鞄は…美華にメールして持って帰ってもらおう。
そう思ってメールをうちながら2階の自分の部屋へ向かった。

送信：美華

本文：今日早退したから荷物家に持ってかえってきて☆★

そう送った。
こういう事は初めてではないので美華ならわかってくれるはずだ。
その時机の上に置かれた大きめの茶封筒に気付いた。
その茶封筒には何も書かれてはいない。
家族の誰かが置いたものなのだろうかと思って封を切った。

「何…これ？」

その中には鍵がついている一枚のピンク色をしたノート。

「未来日記…？」
そのノートの表紙に可愛らしい文字でそう書かれていた。

それを見て、美華の言葉を思いだした。

『なんの前触れもなく選ばれた者に届くー…』

私はなんだか恐ろしくなってそのノートを落としてしまった。

「痛いっ！もうなんなのよ！？」

少し小さな女の人の声が聞こえてビクっとした。
部屋を見渡してみたがもちろん誰もいない。

聞き違いだと思って深い溜め息をついた。

「どこ見てんのよ！ここここ！下下！！」

明らかに今のは聞こえた。
ゆっくりと…さっき落としたノートに視線をおくる…。

「やっとこっちみたぁ」

ノートが…

ノートが喋ってる。

ノートについた鍵穴をパクパクさせながら…。

「何…これ？」

ますます怖くなってノートと距離をとる。

「『何これ』じゃないわよ！みりゃわかるでしょ？？ほらっ私に書かれてるじゃない『未来日記』って」

ノートがバタバタしたながら声を発する。

私は1回深呼吸してノートを手にとった。

「ちょっと落ち着いたみたいね。あなた名前は？」

偉そうな口調でノートは言った。

「愛里…」

「名字は？」

「松原…」

ほんの少しの沈黙が凄く長く感じる。

「登録完了っと！じゃ愛里、この未来日記の使い方とかわかる？？」

私は首を横にブンブン振った。

「そっじゃっ説明するわ」

「はい…」

「使い方って程でもないんだけど、ただ日記を書くだけ。でも日付は未来のものにして使うの。今日は5月15日でしょ？だったら明日起こって欲しい事を5月16日の日付で書いて、1週間後に起こ

って欲しい事は5月22日の日付で日記をつける。それだけ。はい、何か質問ある？？」

「…はい」

と言って私は小さく挙手をした。

「はい、何？」

「その日記って…毎日書かなきゃいけないの？？」

「そんな事はないわ。でも、毎日書かなかった人はいないと思う」

そう言った日記の声は…どこか寂しそうで悲しそうに聞こえた。

「はいっじゃこのノートの基本ルール！！」

そう思ったけど…やっぱり気のせいだったらしい。

「基本的に書いて24時間経ったらもう取り消しはできないわ。絶対に書いた事は消えない。これは最近できたルールだけど、未来日記は放棄したければいつでもできる。今だって断る事はできるわ。

あなたは？？」

私には断る必要もないし…実際目の前にいるこの未来日記を試したくなった。

「引き受けます」

すると何故か…沈黙。

私は何かいわなきゃいけない気がした。

「あの…書いてみていい？？」

すると未来日記はページを開いた。

「気をつけてね…」

鍵穴が…小さな声でそう言ったのが聞こえた気がした。

しかし…書くと言っても何を書こうか？？

私の手は5月16日と書いた所で止まった。

「そうだ！！」

そう一声だしてシャーペンを動かした。

5／16

授業が全部なくなる。

これだけ滅多にない事を書けば、証明できるだろうと思って日記を閉じた。

「とりあえず試用してみるって感じね」

また鍵穴をパクパクさして未来日記は言った。

これにも段々慣れてきた。

「…ねえ…その鍵穴なんのために付いてるの？？」

未来日記を指差して言った。

「あぁ…これは私の魂を宿してる場所でもあるし…口でもあるから無かったら困るの。鍵は必要ない。私が認証するだけだから。でも、所有者の使おうとする意思に私達は逆らえない」

へぇ…なんか結構奥がふかか…？？

「私達って？？」

なんで複数系？

「未来日記って1冊だけじゃないのよ。宿せる魂の数だけ日記は存在する。って言っても世界には数十冊しかないけれど」

さっきから魂、魂って言ってるけど…。

彼女って一体何者なんだろう。

彼女は未来日記自身じゃないの？

「ストップっ私が言えるのはこれ位ね」

「えっ！？」

「こっちにもプライベートってもんがあんのよ」

そう言って日記は伏せるようにして向きを変えた。

「えぇーもっと聞きたい」

「んじゃちょっと答えてあげる」

「じゃあ…あなたの正体は？」

そう聞くと、日記は押し黙った。

結構沈黙が長かったので、私から口を開いた。

そう聞くと、日記は押し黙った。

結構沈黙が長かったので、私から口を開いた。

「あの…」

「それは答えられない。別の事を聞くことね」

どうせ同じ事を聞いても答えてくれなさそうだった。

「じゃ…なんで私が選ばれたの？」

「そんなの知らないわよ。私が決めた事じゃないし。日記の最高責任者で製造者でもある人が選んだから」

「ふーん」

最高責任者で製造者…ねえ…。

「わかった？じゃ私寝るから」

「えっあなた眠れるの？」

「私だって魂は普通の人間よ！！ただ魂が入ってるのが日記なだけ」

なんかその魂ってのが負におちないんだよな…。

「じゃあ…あなた名前あるの？」

日記は眠ってしまったのか何も喋らなくなってしまった。

「愛里ー！ご飯よ！！」

下から母さんの呼ぶ声が聞こえたので私は椅子から立ち上がった。

「由香…昔はそう呼ばれてたっけ……」

日記に背を向けた時……そんな日記の切ない呟きが聞こえた。

独り言だったのかもしれないけど…私は彼女を『由香』と呼ぶ事にした。

次の日私は当然のように学校に向かった。

途中で美華にあったから『未来日記』の事を話そうと思ったが…やめた。

美華の事だからたちまちその噂は広まってしまうだろうと思ったから。

それでも、寝ぼけていたせいか、学校に行って授業を受けるのが当然だと思っていたせいか、私は昨日日記に書いた事をすっかり忘れていた。

ホームルームが始まる時間になっても先生はこなかった。

その時、私は日記に書いた事を思い出す。

『授業が全部なくなるー…』

まさか…ね…。

でも…日記が喋るって事自体ありえないし…。

何が起こっても…おかしくない。

その時教室のドアが開いた。

ざわめきがピタッと止まる。

ほら…やっぱりあの日記は嘘だ。

あの日記も何かのおもちゃだろう。

そう思って入ってきた人を見ると……

全校集会とか、何かの行事でしか見掛けない事務の先生だった。

その人はわけのわからない、信じられないと言った動揺の色が隠しきれてなかった。

「えっと…」

と言って手にもっていた紙を読みあげだした。

「担任の山崎先生は今日家庭の都合でこれません。副担任の田中先生は、インフルエンザでお休みです。それから…」

国語の松下先生。
数学の川合先生。
英語の西村先生。
体育の木村先生。
理科の木下先生。
それからー…

と言った感じで事務以外のすべての先生の名前が読上げられた。

「ー…皆、お休みです。今日はもう帰りなさい」

と言って事務の先生は走って教室を出ていった。

教室はすぐに歓喜の声で溢れた。

私はただ呆然とそれを見ていた。

間違いない…あれは……未来日記は本物だ。

家に帰ってすぐに階段を駆け上った。

アルファベットで

「ＥＲＩ」

と書かれた部屋のドアを勢いよくあける。

そこには昨日と同じ位置に日記がおいてあった。

「驚いた？」

日記の…由香の声がした。

「凄い！！先生みんな休んじゃった！」

「そういう事。この日記は本物だから」

なんだろう…凄くワクワクする。
もっと…この日記を使ってみたい。

もっと…自分の思い通りの世界にしたい……。

「ねぇ！由香もっと書かせて！！」

由香は少し躊躇したが、ページを開いた。

「これって今日の未来の事は書けないの？」

「詳しい時間さえ書けば可能よ」

ふぅーん、と生返事をして時計をみた。

今の時刻は１０時３７分。

今日は授業がなかったからまだ昼前だ。

私はすこし考えて手を動かした。

５／１６
１１：００
梶村　菜々子が家にやってくる。

梶村菜々子とは…私の大好きで憧れのたった一人の歌手。
シングルやＣＤはいつも必ずオリコン１位を取る。
私もその貢献者の一人で、ＣＤの発売日には必ず買いに行く。
私は梶村菜々子に会える事を思うと、興奮してならなかった。

「ベタな願い事…」

由香のその言葉を私は聞きのがさなかった。

「なっ何よ！いいでしょってか勝手に覗かないでよ！！プライバシーの侵害！！」

「はいはーい。まっいい結果になるとは思えないけどー」

どこか意味深な由香の声。

それを無視して私は梶村菜々子が家にやってくる事を思い描いた。

梶村菜々子の歌は人を引きつける力をもっていた。
だからいろんなジャンルの人からの人気を集める。
私もその内の一人になる。
しかも梶村菜々子は総統な美人であって、モデルや女優もやっている。

そんな彼女でもまだ18歳!!
私とあまり変わらない年齢だ。

『ピンポーン…』

そんな事を考えているとチャイムがなった。

時計を見るともう11:00。
私は急に早くなった心臓の所な手をあて、1回だけ深呼吸をした。

そして階段を1段跳ばしで駆け降りてドアノブに手をあてた。

そしてゆっくりドアを開く…。

するとそこには…間違いなく梶村菜々子がいた……けど

テレビで見た事もないような不機嫌な顔。

「あんた誰??」

私の目の前で梶村菜々子が言う。

「えっと…松原愛里…です」

「あんた私の知り合いだっけ?」

「いぇっファンなんです!!」

「ふぅ－－ん。あっそう」

そう言って梶村菜々子はタバコをくわえた。

私は驚愕した。
だってまだ未成年じゃ…。

「梶村さんって…未成年じゃ…」

「あっ!?何いっちゃってんの?あっそっかぁ…テレビとかネット

じゃ18かぁ。いっとくけど私25だから」

25…歳??

若いけど…騙してたの?

「あぁサインしてやるからこの事はだまっといて」

煙を吐いて梶村菜々子は玄関に置いてあった手頃な紙にサインした。

「じゃっなんでここにきたか知らないけど帰るわ」

と言って私にサインを渡して帰っていった。

私は梶村菜々子の背中が消えるまでずっと放心状態でみていた。

「ねっ。そんなもんよ。人は見かけ程できちゃいないの」

私は無意識に部屋に戻っていて、由香にそんな事を言われていた。

私は日記を書く気になれず、布団にもぐった。

ショックが大きかった。
あの人は私の人生の目標だったから……。
布団の中でふけっていると、今はあまり聞きたくない梶村菜々子の着うたが流れた。

着信音かえなきゃ…。

もう…あんな人思いだしたくない。

布団から携帯をとり、開くと美華から着信だ。

「もしもし??」

「あっもしもし?愛里?今から遊ばない??」

正直…そんな気分じゃない…でもまぁ……家にいても暇だし。

「うん…どこで遊ぶ?」

「なんか愛里テンション低いぃ！〇〇駅で1時に待ち合わせねっ！」

異常に元気な声で美華は言った。

「わかったぁ…。じゃまた駅でね」

と言って私は電話を切った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能(たんのう)してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7061a/

SUPER - LOVE

2010年10月28日08時10分発行